

主観的な思いを生み出しているのは、それは思い出である。幼年少女時代のモスクワ生活の思い出であると考ええる。一見未来志向的に聞こえる「モスクワへ」という願いの根本には、実は過去に対する「郷愁」があると言っても差し支えない。そして、郷愁の対象である幸福だったモスクワ生活を支え、この一家の知的で健康的な気風を作り出していたものは、それは父親である。そして、父の死後「モスクワへ」という思いがオリガとイリーナの心の中で強まって来たことを考えれば、彼女たちの郷愁の対象であるモスクワの中心には、いつも父の姿があったと考える。

【マーシャの恋と『ルスランとリュドミーラ』】 マーシャはしばしばプーシキンの『ルスランとリュドミーラ』の一節を口ずさんでいる。「入り江のほとりに緑の櫟の木あり、その櫟の木に黄金の鎖…」この詩句の「黄金の鎖」という言葉がマーシャの不幸な結婚生活を示唆しているとのみ解釈されてきた。しかし、この一節は

『ルスランとリュドミーラ』の話全体と密接な関係を持って使用されており、マーシャの秘められた気持がこれに込められている。マーシャは妖魔に捕らえられたリュドミーラをルスランが救い出すこの物語詩に、「誰か私を今の不幸な結婚生活から救い出してほしい」という思いを託しているのである。そして、そのようなマーシャの前に現れたのがモスクワから来たベルシーニンであった。彼がモスクワから来たということは、マーシャにとって重要なことだったが、それ以上にマーシャが彼に引かれたものは、彼が語る言葉であり思想であった。知性や教養を尊び、教養ある人の存在意義を肯定する思想。これは、実は三人姉妹の父の思想に通じる思想である。救済者を求めていたマーシャの前に現れたベルシーニンは、父の影を背負った人物であったのである。そして、彼女たち夢の挫折や悲恋は、最終的な父との別れのテーマを形造っている。

レールモントフの叙事詩「悪魔」における悪の意味の変遷について

岸 本 福 子

レールモントフの叙事詩「悪魔」«Демон»には八つのヴァリエントが存在する。しかし、最終稿Ⅷ稿（1839年？）の自筆原稿が存在しないことから、定本を定める際に、Ⅵ稿（1838年）とⅧ稿のいずれを底本として重視するか論争が続いてきた。Ⅵ稿とⅧ稿の決定的な相違は、Ⅵ稿では悪魔が天使に勝利するのに対し、Ⅷ稿では悪魔は天使に敗北するという、悪魔と神

の力関係の逆転にある。つまり、この論争は、悪魔の形象および作者の宗教的世界観に関する、研究者の解釈の問題でもあった。従って、Ⅵ稿、Ⅷ稿いずれのテキストに、作者の真意がより明確に反映されているかを明らかにするためには、各ヴァリエントにおける悪の意味の変遷を追い、作者の世界観を検討する必要がある。

各ヴァリエントを調べると、悪魔が本来

持つ性格自体は一貫して変化しないのに、V稿（1833-1834年）以降、悪魔の悪の意味は、人間、悪魔、神の三者の関係の中で、その意味を変えていることがわかる。各ヴァリエントにおける悪の意味の変遷を追うと、次のようになる。

① 悪魔の形象の特徴は、—— 1. 虚無の中に漂う放浪者。2. 現存世界に対する反逆者。3. 知恵の罪惡により、天上から追放された墮天使。4. 人間同様の人格、善悪両方の感情を持つ。5. 悪魔の性格は *страсть* 「情欲、情念、情熱」。——である。この悪魔の形象は、悪であると同時に善への可能性を秘めているものであった。そしてそれは、各ヴァリエントにおいて終始一貫していて変わらない。

② V稿から地上の人間の悪のテーマが導入される。V稿では、信仰を失った地上の教会権力の腐敗と野心、権力に無抵抗な奴隷達、「人間の群れ」が描かれる。悪魔は信仰を失った人間の悪の批判者であり、地上への非難を動機として、自らが宇宙の支配者となることを望む。VI稿以降、悪魔の支配の意味は深化し、時間を超越した認識者、世界の客観者という神の支配像を持つようになる。ここには神に反逆する悪魔のイメージよりも神そのものとなろうとする悪魔のイメージがあり、悪魔の自我の無限の拡大が表明される。

③ 一方、V稿以降、作者は悪魔の形象を魅力的に描きながらも、悪魔の存在を人間批判を語る手段へと変えた。作者は悪魔の人間批判をとおして、人間の悪、すなわち、信仰を失い墮落した人間、権力という人間の自我の無限の拡大、人間の無知を非難する。「私の仕事（人間に知恵の木の実を食べさせた。）に値するのは、ただ愚か者や偽善者だけなのだろうか。」（Ⅷ稿 II章 X）「世界は安らかな無知の中で、私なし

に咲き終わればいい。」（Ⅷ稿 II章 X）これらの悪魔の言葉には、作者の読者に対する逆説的なメッセージが与えられており、無知、盲目の中に真の信仰は存在しないという作者の主張が含まれている。つまり、このメッセージの裏には、認識に基づいたより深い信仰を人間に求める作者の真意が隠されている。VI稿以降、地上の悪の象徴が、教会から封建領主へと変えられ、十字架が安息の象徴として描かれ、自然が讃美される。そして、Ⅷ稿において教会の不滅が書き加えられたのも偶然ではなく、作者の信仰心を裏付けるものと考えられる。

④ 従って認識に基づく信仰が作者の真意である限り、自我を無限に拡大させ神にまでなろうとした時、悪魔の真の悪が成立したといえるのであり、悪魔の行動は作者の真意に反するものであった。その結果、悪魔が、敗北する運命におかれることは必然的であった。

（結論） 人間批判により自己の悪を発展させ、支配と神の位置を望んだ悪魔は、神の虚像に過ぎない。神の虚像は、シェリングが言うように、「生きた有機体の個々の部分や組織が、全体から逸脱すると炎症を起こすように、一切であろうとする傲慢さゆえに、かえって神、全体、統一から自分を引き離して」（「人間的自由の本質」1809年）虚無に到る。悪魔の自我の拡大と有機体との関わりという矛盾から、悪魔の敗北と永遠の放浪という物語の結末は、内容の深化であり、物語の自然な展開であった。レールモントフは、認識に基づいた信仰を求め、世界とその一部という関係の中で、自我の存在を主張しながらもその拡大は否定した。この結果、悪の意味の点からも、Ⅷ稿には最も作者の真意が反映されており、Ⅷ稿を底本とすることが妥当であると結論できる。